

Report from the EDGE

会長挨拶



5月25日に第一号を出して以来、急展開に助成金を大和日英基金とグレート・ブリテン・ササカワからいただき、念願の英国研修旅行(8月中旬)と英国よりの専門家招聘(9月中旬)を実現することができました。それに先立ち、6月後半から7月はじめにかけてはアメリカ・ワシントン

DCで行われたIDA(International Dyslexia Association)の会議に出席、と文字通り飛び回っておりました。

またその間にも、事務所の引越し、東京、大阪における二回のシンポジウム主催と積極的にまい進してきました。

今回はこれらの活動を通して学んできたことを中心にした内容にいたしました。形に見える成果はまだまだ先かもしれませんが、一連の活動を通してすばらしい方々にめぐり合うことができ、より具体的にEDGEの進むべき道が見えてきたように思えます。

一時でも早く、日本にいる読み書きが不得意なために自

分の能力が十分に発揮できない人たちが(子供とは限りませんが)が楽に暮らせる社会が出来上がりますように、と小さな一歩が踏み出せたのではないかと考えています。これから取り組まなくてはならないこと、それは、ディスレクシアなのかどうかを判る教育的アセスメント、その強みを使った指導法(IEP)の策定、またその強みを使った指導に使いやすい教材作り、そしてこれらを使いこなすことのできる人材の育成などが上げられます。また今、メールなどでいただくご相談にはどこで教えてもらえるの?というご質問が数多くあります。これにはEDGE・NETと称して、EDGEがいろいろな分野の方をつなぎ、ディスレクシアの人たちのために動くことができるネットワークが作ればよいと考えております。

二年以上かけて準備してきた活動の基盤がやっとできつつあると感慨をもっています。これまでは夢を語って、ドンキホーテの様だと言われていましたが、決して手の届かない夢ではないと、今、実感をするとともにまた一段と気持ちを引き締めて前進しようと考えております。

藤堂栄子

ありがとう、 フォルカーせんせい

★五十嵐めぐみ(女優)さん
すいせん!

P・ボラッコ/作・絵 香咲弥須子/訳 ●小学校低学年から



トリシャにとって、字も数字もくねくねした形にしかみえません。クラスの友だちが、読めないことを笑うのでトリシャの苦しみはますます。5年生になったとき、新しい先生との出会いによって、彼女の人生が変わります。

A4変/40頁/本体1,400円(税別)

LD(学習障害)児の
心のさけびと
感動の出会いを描く絵本

岩崎書店 〒112-0005 東京都文京区水道1-9-2 TEL 03-3812-9131

Design

On-demand

Printing

Programming

Publicity

Marketing

① 貴社の印刷物・HP制作にご提案!

- * 少部数カラー印刷を低コストで作りたい...
- * ホームページの制作~管理・運営をしたい...
- * カッコイイDM・チラシを作りたい...
- * データベースの活用で得意顧客をアップしたい...
(顧客管理、商品管理、販売管理 etc.)

- 低コストはもちろん、貴社のウリを顕在化し、実績につなげるものをつくります。
- ホームページやチラシ・名刺・会社案内・DM等各種印刷物のデザイン制作及び印刷。各種データベースの企画・制作 等お気軽にご相談下さい。

ご相談は今すぐ電話かメールで。

☛ Tel: 03(3518)0230 mail: info@octo.jp

株式会社日本オクトシステム
〒101-0054 東京都千代田区神田
錦町 3-15-6川崎パークビル7F
http://www.octo.jp

Octo
(株)日本オクトシステム

シンポジウム開催、東京・大阪

7月7日 東京

～ぼくたちからのメッセージ～

EDGEの藤堂会長と、ADHDの支援をしているえじそんくらぶの高山代表との最初の出会いで、意気投合した二人は、この共催のシンポジウムを企画。なんとと言ってもこのシンポジウムのテーマは、「ぼくたちからのメッセージ」に集約されます。企画は当初、それぞれの症状を持つ青年と、自らもADHDとおっしゃる高山代表が司会進行をかねて三人の対談を行い、青年たちのカミングアウトや社会へのメッセージを送る場として、たくさんの若者に、ディスレクシアやADHDを正しく理解してもらおうとスタートしました。

しかし企画会議を重ねるたびに、希望や夢も膨らみ、ついには東京のど真ん中で、280人の収容が可能な会場（麻布区民センター）で、開催することとなり、クリニックかとう院長、加藤醇子先生の基調講演「ディスレクシア・ADHDの理解に向けて」をはじめ、メインの鼎談、そして二人の青年、加藤先生、藤堂会長、高山代表に加え、文部科学省特別支援教育調査官の柘植雅義氏にもご参加いただき、「日英の教育の違いと日本での今後の支援」と題した討論会も行われたのです。会場はおかげさまでももちろん満席でした。

鼎談では彼らの子供時代から現在に至るまでの周囲の環境や、経験談、そのときの悩みなどが紹介され、高校時代にイギリスに留学して初めてディスレクシアとわかった彼は、そのときのことを、自分が何者かと言うことがわかってとても救われたと述懐しました。その後もイギリスで学ぶ彼は、ディスレクシアの人に才能を持つ人が多いとされる建築の分野に進み、この秋から専門の学校に進んでいます。その彼が話すイギリスでのアセスメントや学校のサポート体制について、一方、ずっと日本で育ってきたADHDの彼は（現在大学4年生）その環境を非常に羨ましい状況だと語り、早く日本もそこまで追いつかねば、と声を大にして、その理解と支援を求めました。討論会ではそれぞれのシンポジストたちにはご指名で活発に質問がなされ、青年たちが「困ったことですか？恋愛のことですかね?!」と答える一幕もあり、会場とも一体となった和やかな明るい雰囲気でのシンポジウムとなりました。会終了後のロビーは、青年たちの勇気を称える人たちでごった返し、いつまでも感動の余韻の残る、ホットな七夕の一日でした。

会の最後の方で、当日ご夫人とこのシンポジウムをご覧下さっていた、日本LD学会会長の上野一彦先生には突然のご指名にもかかわらず、壇上まで足をお運びくださり、すばらしい感想を頂戴いたしました。そのお話も、今回は掲載させていただきます。（高多靖子）

8月19日 メッセージは大阪へ

会員 名古屋在住 荻野ます美

8月19日、お盆明けの月曜日に大阪医療福祉専門学校において、EDGE主催による講演会が行われました。

午前中に国立精神・神経センターの宇野彰先生と神戸YMCAの西岡有香先生にお話し頂き、午後からはディスレクシアをもつ学生の藤堂君とEDGEの副会長長田も加わり、ディスカッションを行うという、かなり内容の濃いタイトなスケジュールとなりました。

開場直後から、席は最前列から埋まっていき、2度にわたり「席を詰めて下さい」というアナウンスをさせて頂く程の盛況ぶりで、スタッフ一同驚くやら喜ぶやら・・・嬉しい悲鳴をあげながらも、適切に対応できたと思います。

講演では、宇野先生が、ディスレクシアは脳の機能

●上野先生コメント

日本LD学会の上野でございます。私は今日の二人の青年のことを忘れたいと思います。この研究をずいぶん長い間やってきましたけれど、これだけ本人が見事な言葉と見事な態度で自分を表現できて、なおかつ自分のことを本当によくわかっている素晴らしい青年であるということに、大変感動いたしました。二人のことを忘れたいと思ったわけです。

また、藤堂さんの「そのままがいいのだ」「特別でいいのだ」という言葉も心に残りましたし、先ほどソリューションという言葉がありましたが、日本でもこういう受け入れの場があってほしいと思います。さらには、大変申し訳ないけれども、そういう意味での今の日本の状況は極めて不十分です。私たちは、今のあなたたちの願いとか思いを実現したいと思って頑張って参りましたし、これからも頑張って参りたいと思っています。

これから全国で、LDのみならず、支援を求めている子どもたちのために、早く気づいて、そして的確な指導を与えるシステムを、先ほども出てきました校内委員会、あるいは専門家チーム、そして津々浦々の学校の中に作ろうと、今みんなが努力しているところです。

いつ、そういうことが出来るのかというと、確実に回りだしてはいるのですが、そのスピードが私たちに与えられた課題だと思っています。

こういう素晴らしい企画を今回作っていただいた、EDGEの藤堂さんと、えじそんくらぶの高山さんにお礼を申し上げて私の感想にしたいと思います。



障害の一つであり、言語体系による出現頻度の違いはあるものの、確実に存在する障害であることをことをわかりやすく説明して下さい、西岡先生が、既存の指導方法では効果がないばかりか本人の負担が増すばかりであることを明言して下さいました。

更に、もともと50分しかなかったお昼休憩の後半15分に「LD疑似体験」を行うことを、事前の案内もなく、当日のアナウンスのみでお伝えしたにもかかわらず、7割以上の方が昼食を早めに切り上げて疑似体験に参加して下さった事に、関心の高さを感じました。

ディスカッションでの藤堂くんの淡々とした語り口と誠実な応答は、参加された方々に印象深く残ったことが、講演会終了後に回収したアンケートからも読みとれました。

更に、休憩中に集めた質問用紙はかなりの数にのほり、先生方に昼食の時間を割いてご検討頂かなければならない程でした。それら全てに丁寧にお答え頂けたので、参加された方々は十分満足し、納得されたと思います。

――「繰り返し読みと書きの練習をすれば改善されるのではないですか?」――

先生方のお話を聞いた上で、なおもこの質問が出るころに、日本のディスレクシアの子ども達のおかれています過酷な現状があります。

「それで何とかなれば苦勞はしません。」と応じた西岡先生のきっぱりとしたフレーズを、頭の中でリフレインしながら帰途につかれた先生方も多かったのではないのでしょうか。

難しい研究の分野は専門の先生方にお任せして、この「リフレイン」を出来るだけ多くの方に感じて頂くことが、地方にいる私たちの役割だろうと考えています。その意味でも、今回は「啓蒙」のごくごく第一歩ではありましたが、目的を達成することが出来た価値ある講演会だったと思っています。



ちょっとかわった私たちが、 ちょっとわかったアメリカの様子

副会長 長田政江

藤堂会長と私は、6月27日～29日まで、ワシントンDCで開かれたIDA※の国際会議に参加いたしました。今年のテーマは、“多言語と異文化におけるディスレクシア”というもので、たくさんのセッションや、シンポジウムが開かれました。日本人発言者、小林マヤさんの「日本の子どもの『読み』における言語認知上の要因」と題されたセッションを聞き、館野智恵子さん、山田メグミさんのポスター展示発表を拝見しましたが、どれも大変興味深いものでした。参加したどのセッションでも、phonological awareness・・・音韻意識が、言語習得のメカニズムを理解する上で重視され、それと視覚認知との関連の中で、ディスレクシアが語られているように思いました。私に認知心理学的手法の基礎知識と、英語力がもっとあれば、より深く理解できたのに・・・と思うと残念です。参加者も、心理学関係の方から教師、そして私たちのような“支援団体”まで多彩で、会場には“ウェルカム”の雰囲気があふれていました。

学会に先立って、ボストンでは加藤醇子先生のご好意により、今回の大会のチェアマンであるヘインズ博士を通して、Lexia（教材ソフト開発会社）の社長とも



お会いし、私自身もその英語教材の面白さを試すチャンスをいただきました。おいしいランチを湖畔でランドマーク・カレッジ（LD児教育で有名）の先生方といただいた後、ヘインズ博士の運転でカレッジまで案内いただきました。ボストンやワシントンDCでの経験を通して、改めてアメリカの懐の深さを感じて帰ってきました。加藤先生のお誘い、心から感謝いたします。

※IDA＝インターナショナル・ディスレクシア・アソシエーションの略

大和日英教育基金助成事業 英国研修に参加して

玉川大学教授 山口栄一

去る8月16日より23日まで、1日の休日をはさんで6日間にわたり、ロンドンにあるHornsby Dyslexia Centreで、ディスレクシアのアセスメントを中心とする研修が行われました。参加者は藤堂会長を含めて、総勢7人。それぞれが個性の強い人々で、私を除いては、みな時差ぼけを感じさせないほどの熱意を持って参加していました。

内容は、ディスレクシアをめぐる概略的な話とWISCを中心としたアセスメントからはじまって、教師用のテスト、教授法などが説明されました。英国ではディスレクシアへの関心と研究・教育は長い歴史を持ち、1993年のCode of Practiceによって、ディスレクシアへの支援が法的に義務化されていること、教育支援のシステムができてい



ることが印象的でした。

主要なテーマであるアセスメントでは、WISCと教師用のテストとその利用に多くの時間が費やされました。WISCは言語性と非言語性のテスト

トから構成されています。ディスレクシアは言語性のテストに問題を生じ、非言語性はよいため、その特徴をはっきり示すので、彼らの識別によく使用されるのです。わが国ではWISCは簡単な研修を受ければだれでもが使用できますが、英国では、公的な資格を認定された教育心理学士のみが許されていることを知りましたが、それは支援システムと無関係ではありません。つまり、支援のための法的な根拠を与えるのがアセスメントだからです。

教師用のテストに関しては、時間の関係でやつぎばやにテストが紹介され、私たちが苦しめました。ディスレクシアは読み、書きに困難があるのですから、当然ながら、テストは英語の問題に集中します。英語のつづりと発音の不一致というのは、ほんとにひどいものだとこのことを、こうした学習困難について学ぶことによって、実感したこと

は確かでした。また、RAVENSという非言語性のテストは、WISCの結果との相関が高いので、WISCを使えない教師には、利用価値の高いテストです。こうしたテストは基本的に、年齢の平均

から何才遅れているかが識別の目安とする(Discrepancy Model)ので、ある程度の年齢にならないとテストとしての識別能力がないことが気になる点でした。

もっとも、アセスメントは、こうしたテストだけでなく、教師の観察や親からの聴き取りなどの全体的な判断にもとづきますので、いわゆるテスト屋の仕事ではないことは、私たちを安心させましたし、それが教育に生かすためにあることの重要性を認識しました。一方で、法的な強制力のあるステートメントを書くことができるのは、教育心理学士やBDA(British Dyslexia Association)が公認するディプロマであるAMBDA(Associated Member of BDA)の資格が必要ということが、日本の現状とまったく異なることを知らしめたのでした。

参加者はBDAのあるReading(これでレディングと読む)からローカルな電車でおよそ1時間ゆられ、たどりつくまでと休む間もなく、朝10時30分から午後の4時30分まで、すべて英語で、びっちり行われました。講師ははじめは日本人であることを意識してか、相手にあわせるように話すのですが、次第に相手かまわず話しはじめるのは、日本の教師と同じです。途中でランチタイムがあるとはいえ、情報量からいって、次第に過酷なものとなりました。講師もタフだと思いましたが、受講者はそれ以上にきついものでした。

しかし、創始者のBeve HornsbyさんやHazel McKayさんをはじめ、実践にたずさわる人々にお会いでき、その熱意と暖かさにふれたことは、私たちのやる気を喚起しましたし、それぞれが課題をもって帰国できたことが何よりの収穫であったと思います。



■ 英国研修スケジュール

第一日目8月16日(金)	a. ディスレクシアの原因と研究 b. ディスレクシアへの対応(公的機関、民間)
第二日目8月17日(土)	WISC他アセスメントについて: 英語のディスレクシアの発見とその後の教育
第三日目8月19日(月)	教育的アセスメント-理論-英語の場合
第四日目8月20日(火)	教育的アセスメント-実践-英語の場合(その1)
第五日目8月21日(水)	教育的アセスメント-実践-英語の場合(その2)
第六日目8月22日(木)	今後の見通し-日本語用の教育的アセスメント
第七日目8月23日(金)	まとめ

グレートブリテン・ササガワ財団助成事業

日本LD学会に参加して 国際ディスレクシアコンサルタント イアン・スマイズ博士

3年ほど前に私は自閉症に関するインターネット・バーチャル・コンフェレンスの企画チームに加わることを求められた。私に自閉症の専門性があったからではなく、技術と全般のアドバイスを求められた。私に言わせると彼らは不幸にも会議とは何かという根本を見誤っていたような気がする。それを今回の学会は私にはっきりと伝えてくれた。バーチャル・コンフェレンスでは論文を発表し、メールで意見交換をして、顔の見えない聴衆と質疑応答ができるという。日本LD学会ではどうだったろう。

私が覚えているのはおいしい食事を囲みながら、面白い方たちとお会いした大きなレセプション；本は買い求める前に実際に手にとって見られた展示場；研究者、教師、保護者そして日本におけるディスレクシアの経験を書いた少女を含む人々と話すことができたこと；日本語は話せない（今のところは）ものの日本語の困難さは理解しているように見えることに賞賛を惜しまなかった聴衆の前でプレゼンテーションをしたこと。本物の大雨に濡れ、ビルの谷間で迷子になり、おいしい食事を口にしてと、バーチャル・コンフェレンスでは到底得られない経験だった。

学会にはこれからも参加したいが、今回のような現実の学会でなくてはならない。

9月20日

シンポジウム

「イアン・スマイズ氏を迎えて 日本語のアセスメントを考える」

英国におけるLD・ディスレクシアのアセスメント・ツール開発者であるイアン・スマイズ博士をお招きし、今後のわが国におけるディスレクシアに関するアセスメントの在り方などについて、シンポジウムを開催いたしました。

グレートブリテン・ササガワ財団の助成により、招聘が実現したイアン・スマイズ博士の来日は、まだまだ夏の名残を感じさせる9月の半ばのことでした。

来日直後から早速、東奔西走し精力的な活動を見せていた博士の最初のシンポジウムは9月20日（金）午後6時半から港区青山のコミュニティハウスにて行われました。

おりしも、第11回LD学会の開催を目前にしており、シンポジウムには全国から上京されている各分野の専門家の先生方がお集まりくださり、博士の講演にもかなりの熱が入りました。そのせいか？予定時間を大幅に食い込んでしまい、お集まりいただいた先生方の質疑応答の時間が思うように取れなくなってしまう、という残念な事態も起こってしまいました。講演内容は、参加者には、EDGEから後日翻訳してお送り、HP等での発表も考えております。

9月23日

自主シンポジウム

「ディスレクシアの評価と 対応の問題点」

日本LD学会第11回大会（9月23日、明治学院大学）にて加藤醇子先生により開会され、シンポジストのイアン・スマイズ氏はいろいろな言語でのアセスメントについて、安藤壽子先生（横浜市立豊岡小学校）と吉村亜紀先生（川崎市立麻生小学校）は学校現場からの研究報告、二峰紀子先生（札幌かかわり教室）からはリソースルームの指導方法としてのDAISY（デジタル音声情報システム）活用の発表がありました。最後まで多くの方々が、熱心な討議に参加しました。

スマイズ博士の提唱する教育的アセスメント

教育的アセスメントの目的は一人一人の学習上と認知の強みと弱みを知り、本人の興味と動機付けを基にした適切な個別指導プログラムを作ることにあります。読み書きの習得には音韻、聴覚、視覚、スピード、セマンティック（意味辞書）などの認知の分野（脳内の処理過程）がかかわっており、言語によってその影響力の比重が変わるといのが彼の説です。日本語に適用していく開発を今後EDGEでは進めてまいります。コンピュータによるテストも考慮されており、ウェールズでは開発中です。

NICE TO MEET YOU

9月19日、イアン・スマイズ氏を東村山市立秋津小学校2年生と、所沢市立美原小学校1年生の授業参観に、ご案内しました。スマイズ氏からの「国語の授業を……」という希望にそって、精一杯応えてくださった福田・白倉両先生に深く感謝いたします。どちらの先生も、子どもたちとの間に“信頼感”をしっかりと築いていらっしゃるの、とても印象的でした。

運命の糸

所沢市立美原小学校教諭 白倉 節子

さる方の紹介でこの度高名な、イアン・スマイズ博士にお目にかかれ、且つ授業を見ていただいたことを、大変うれしく思います。これも何か赤い糸で結ばれていたのではないかと感じました。当日、教室の窓から見える校門を子供達は、朝からミーアキャットのように見て待ちました。「先生、今日のお客様どんな人、どんな顔してる、背は高いの」矢継ぎ早の質問に、私も同じ気持ちでワクワク・ドキドキしていました。

読むこと・書くこと・発表することを組み込んだ国語のスペシャルメニューに、子供達は張り切りました。「大きなかぶ」の劇化では、いつもは小さな声しか出せない子が、「うんとこしょ、どっこいしょ」と大声を出したのには驚きました。しりとり列車でもたくさんの言葉をつなげることができました。

あっという間の一時間が終わり、給食もご一緒しました。版の子供達は身振り手振りで、牛乳の飲み方、箸の使い方を教えていました。最後運動会で踊ったばかりの花笠音頭をご披露しました。「上手」と誉められ御満悦の一日でした。

<交流>を望む！

東村山市立秋津小学校教諭 福田 三津夫

(「演劇と教育」編集代表)

9月のある日、イアン・スマイズさんが2年生の私の学級を訪問してくれた。国語の授業を見たいということで、私が用意したのは漢字の成り立ちの学習、発声練習も兼ねた群読「お祭り」(北原白秋)「ことばあそび」(酒井誠)、そして朗読劇「ねこのしゃしんかん」(森山京)だった。わずか2時間たらずである。

私が教育実践で大切にしているのは、<演劇教育>ということだ。ことばとからだのしなやかさを求めて、表現力を豊かにし、コミュニケーション能力を高めることがその大きなねらいになっている。そのためのメニューが前述の授業だったが、スマイズさんはそれをどうみてくれたのだろう。なにしろ、話をする時間がわずか十数分間だった。一番肝心なことが聞けなくて残念だった。

ことばの教育ということでは、私は基本的には集団のダイナミズムのなかでの学習を考えている。おそらく個別学習を重視するであろうスマイズさんとの議論もおもしろかったのだが、時間的な余裕がなくて本当に残念だった。次の機会があればそれに期待したい。

山崎学園富士見中学高等学校の英語科の先生方、特に英会話の授業を公開してくださったアンドリュー先生、その後のミーティングに加わってくださったサイモン先生、ありがとうございました。日本の私立中学における外国人先生方の健闘ぶりが、たいへん印象的でした。

● ● パーソナル・ストーリー no.2 坂井裕子さん

<お馬鹿な理由>

私はロンドンクリニックで鍼灸、指圧をするため約8年前に渡英してきた。そして4年程前英国に長期に住むことを決めた頃、ロンドンのあるセンターでディスレクシアのアセスメントを受けた。アセスメント直後テストの教育心理学者から“あなたは紛れもないディスレクシアです”と告げられた。私は家に帰って夫に“良かったア、私って単なるお馬鹿じゃなかったのヨ”と言った。すると夫は“お

馬鹿じゃなかったら、何なわけ？”と問うた。私は困ってしまった。お馬鹿じゃなくて、ディスレクシアだったわけだけど何と説明していいやらわからなかった。それから一年後、夫が質問したことさえ忘れてしまった頃のある日、私は答えを出した。“あのねえ、単なるお馬鹿じゃなくて、理由のあるお馬鹿のように見える状態だったわけ”と。私は在英4年目にして、英語の個人レッスンの教師にディスレクシアかもしれないと指摘され、その一年後外国人でも



Infomation ②

六本木への事務所移転 (7月)

今までのNPO-EDGEの事務局は青山一丁目にありました。交通の便はいいのですが、そこは藤堂会長の自宅兼事務所。広々とした空間とは言い難い所に、EDGEの荷物が侵食していきました。いつも探し物の時間が必要になり、また助成金申請時も会長の税金逃れではと、疑惑の目で見られる始末。ないない病と脱税の疑いから逃れるために、早く引っ越し先を探さねばと焦っておりました。そこへ港区区民の会長が旧三河台中学校にNPOハウスを作る話を聞きつけ、応募。晴れて元図書準備室を確保しました。今では、ちょっとした会議を開くことも可能になりました。

NPOハウスには、NPOサポートセンター、NPO推進ネット等、27団体が入居しております。協力し合える団体も多く、事務所移転のメリットは十分にありました。

会員募集

東京や大阪の講演会では、大勢のボランティアの方々に支えられて、成功裏に終えることができました。このほかEDGEは会員の様々な形のご支援によって成り立っています。EDGEの事業は助成金や寄付に依って行われていますが、活動や運営費は会費によって賄われています。皆様の日頃のご支援に心より感謝いたしますとともに、更なる啓蒙や支援の活動源として、EDGEの会員増強にお力をお貸しくださいますよう、ご協力をお願いいたします。

2002年度(平成14年6月1日～)
NPO/EDGE 活動報告

- 6月9日(日) 第一回LD親の会(NHK主催)にて、EDGEブース参加
- 17日(月) HPリニューアル
英国研修公募開始(7/13締切)
- 22日(土) 藤堂会長、長田副会長
IDA参加のため渡米(7/2帰国)
- 7月7日(日) NPO・EDGE NPO えじそんくらぶ
共催シンポジウム ディスレクシア(LD)・ADHDへの理解と支援
～ほくたちからのメッセージ～
- 24日(水) EDGE事務所移転
- 8月1・2日(木・金) 神奈川私学経営勉強会にて
講演 藤堂会長
- 15日(木) 英国研修に出発(25日帰国)
研修生7名
- 19日(月) NPO・EDGE大阪講演会 主催
- 9月8日(日) 英国研修帰朝報告会
- 15日(日) イアン・スマイズ博士来日25日帰国
- 20日(金) イアン・スマイズ博士をお迎えして
日本のアセスメントを考えるシンポジウム
- 22・23日(土・日) 日本LD学会第11回大会
EDGEブース出展
- 23日(月) 自主シンポジウムシンポジスト
スマイズ博士、藤堂他
- 10月12・13日 港区民祭り
- 19日(土) NPO EDGE 設立一周年

今後の予定

- 11月1日(金) 「スウェーデンにおけるDAISYの
認知・知的障害者への応用」
18:00～20:30 日本財団2階大会議室
講師：ハンス・ハンマルンド氏
主催：(財)日本障害者
リハビリテーション協会
後援：NPO・EDGEほか
 - 11月22日(金) みなとNPOハウスのオープン記念
イベント
入居団体(27団体)オープンハウス
15:00～シンポジウム・18:00～パーティ
 - 23日(土) 【子どもNPO・子育て支援メッセ2002】
会場：みなとNPOハウス
子育て支援団体やNPOのブース、
記念公演、子育て体験コーナー、
子どもの遊び体験、舞台作品上演
(俳優座)、ほか
- 2003年2月 第2回EDGE総会

Report from the EDGE - 第二号 -

2002年10月25日発行

発行者 NPO法人 EDGE

発行責任者 藤堂栄子 東京都港区六本木4-7-14
みなとNPOハウス4F

編集 高多靖子

印刷 株式会社オペラ

http://www.npo-edge.jp

e-mail: info@npo-edge.jp

監修・メソッド：増田 忠士(ますだ ただし)

パソコン用 タッチタイピング習得ソフト

CD-ROM

増田式 最新メソッド 改訂版

Windows
XP, Me,
2000, 98
Macintosh
に対応

ラクして覚えるキーボード

大好評、発売中! 4,800円(税別) 品番: SR-004

※全国のパソコン取扱店でお買い求め頂けます。素晴らしい動作環境はパッケージまたはホームページでお確かめ下さい。



書籍などで定評のある増田式ブラインド・タッチ練習法CD-ROM!
既に110万人以上の方が増田式でブラインドタッチをマスターしています。
音声ナレーションによる練習進行で、自宅がパソコン教室に、
1日30分トータル5時間で、キーボードをらくらくマスター。

■3大特長

1. 書籍や通信教育テキスト等で定評のある増田式最新練習法を提供。
2. 全編音声ナレーションによる解説付きで、わかりやすい画面構成。
3. よく使うメールやビジネス文例を300文例収録。自由に使用可能。

発売：(株)シンフォレスト
〒150 東京都渋谷区恵比寿1-12-1三共ビル5F 03-3440-6108 (代)
http://www.synforest.co.jp/keyboard/

